琉球大学学術リポジトリ

スタインベック研究　―1930年代と『怒りのぶどう』―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2008-09-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 仲地, 弘善, Nakachi, Kozen
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7050

スタインベック研究
—— 1930年代と『怒りのぶどう』 ——

仲 地 弘 善

I

1966年にベトナム戦争の実態を直視するためのルポ記者として従軍することにより、ジョン・スタインベック John Steinbeck (1902–1968) のプロレタリヤ作家としてのイメージは完全に払拭されてしまった。1930年代のプロレタリヤ作家の系譜で捉えられてきたスタインベックは、1960年代の前半において、すでに「過去の作家」というレッテルさえ貼られていた。それ故、1962年度のノーベル文学賞をスタインベックに授与するとのスエーデンのノーベル賞委員会の発表は、スタインベック自身も含めて多くの文学批評家達を驚かせたものだ。とくに、アーサー・マイズナー Arthur Mizener は『ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュ』紙上で、スタインベックの1930年代の "moral vision" が1960年代に通用するのだろうか、との論旨でスタインベックを酷評し、スタインベックへのノーベル文学賞授与に異議を表明した。[1] スタインベックを擁護する研究者も、酷評する批評家も、スタインベックの創作家としての力量が『怒りのぶどう』*The Grapes of Wrath* (1939年) を書いた直後から『エデンの東』*East of Eden* (1952年) を書く直前までの間に急激に衰えだしているとしている点では、意見が一致しているようだ。[2]

したがって、スタインベック研究は必然的に1930年代に向けられ、1930年代のスタインベックの作品とか、創作ノートとか、手紙等を研究していくことが、彼の文学の本質に近づける一番よい方法であると思われるので、本研究論文でのアプローチも、おもに1930年代の代表作である『疑わしい戦い』*In Dubious Battle* (1936年) や『怒りのぶどう』

を検証することによって、スタインベックの文学が 1930年代のプロレタリヤ文学の潮流の中で、どのような位置を占め、どのような特質を持った文学であるのかを検討していくことになる。

結論から先に言うと、たしかに取り扱っている題材はプロレタリヤ文学のそれに類似しているのだが、視点及び主題は結局はプロレタリヤ文学の潮流からはかけ離れていたと言える。

スタインベックの作品の中で、とくに顕在ししいる文学的特質は生物学的視点に立つ非目的論的思考 non-teleological thinking と神秘主義的開眼を遂げる「スタインベック・ヒーローズ」と呼ばれる登場人物の存在であるが、非目的論的思考に基づく「集団人間」"Group - men" の描写とプロレタリヤ作家達の「集団人間」の取り扱い方の相違に注意を向けねばならない。スタインベックの非目的論的思考は、人間を「集団人間」としてマクロ的視点から観る傾向があり、「集団人間」の生態観察を通じて、その「集団人間」の中に生命体の中核細胞としての眼球が形成されていく過程に興味を寄せていると言える。したがって、ストライキ参加者達や移住労働者達のような集団は、彼の人間観及び世界観を表明するのに適していたのだ。

一方では、非目的論的思考に基づくリアリズム作家としての側面があり、もう一方では神秘主義的な人間観・世界観に裏打ちされたものを、スタインベックは持ち合わせているのだ。とくに、「スタインベック・ヒーローズ」と呼ばれる登場人物は非目的論的思考の持ち主であると同時に、「神秘主義的な開眼」"breaking through to understanding of a deep thing" を遂げる人物達であるのだ。二つの相反するようにみえる思考が、「スタインベック・ヒーローズ」の中では、不思議に融合する。その典型が『怒りのぶどう』と言えよう。

II

文学史的見地から、スタインベックをプロレタリヤ作家の系譜に位置づける研究者及び批評家は多い。まず、ジョセフ・ウオーレン・ビーチ Joseph Warren Beach は『怒りのぶどう』をプロレタリヤ小説の最大傑作と位置づけているし、[3] マルカム・カウリー Malcolm Cowleyも、"Another proletarian novel, *The Grapes of Wrath*, was not only a best seller but most widely read book of the year."[4] と指摘している。さらに、プロレタリヤ文学について、カウリーは、「1932年から1934年までがプロレタリヤ文学がラディカルな文学理論として最も重要であった時期だった。そして 1934年から 1936年にかけては、芸術と政治の関係について議論が発展して、マルクス主義批評の有効性が問われている段階」[5] と述べ、"By 1936 a whole chorus was chanting that proletarian literature was dead and buried."[6] と指摘している。「プロレタリヤ文学は死滅し、埋葬された」と言われている時期に、スタインベックのプロレタリヤ作家的題材を持つ『二十日鼠(ねずみ)と人間』*Of Mice and Men*（1937年）や、『疑わしい戦い』や、『怒りのぶどう』が登場してきたのだが、文学史的見地から、これらの作品をプロレタリヤ文学の系譜で捉えることは、かならずしも見当違いではないのかもしれないが、そのように位置づけることによってスタインベック文学の特質を歪曲する恐れがあるとすれば、異議申し立てをしておかなければならないだろう。

1929年のニューヨーク株式市場での大恐慌に続く 1930年代の不況は、プロレタリヤ文学の台頭する素地を作ったと言われている。プロレタリヤ文学を支援していた小雑誌『ニュー・マッシズ』誌 *New Masses* や『パーティザン・レビュー』誌 *Partisan Review* の論客達、特に、フィリップ・ラーブ Philip Rahv やジエイムズ・T・ファレルJames T・Farrel は、1930年代において早くも、スタインベックの小説が左翼イデオロギーの本質的なものを欠いた、センチメンタルなものであると酷評していた

と言われているし、[7] スタインベック研究の第一人者として知られているピーター・リスカ Peter Lisca もスタインベックがその時代の文学的及び政治的プロレタリヤ運動と何ら関わっていないことを考慮しておく必要がある、と指摘し、更に、スタインベックが 1930 年代のプロレタリヤ作家・批評家・研究者のどの組織にも参加していなかった事実や、そのようなイデオロギーにもコミットしていなかったことを論証している。[8] 1930 年代のプロレタリヤ文学運動からスタインベックが地理的にも心理的にもかなりかけ離れていれことは明瞭である。

1930 年代のプロレタリヤ文学運動の中核部には、現在ではあまり名の知られていないマイケル・ゴールド Micheal Gold や、ジャック・コンロイ Jack Conroy や、ロバート・キャントウェル Robert Cantwell 等のプロレタリヤ作家達がいたし、そのすぐ周辺には、1910 年代、1920 年代のモダニズムの洗礼を受け 1930 年代になって一時プロレタリヤ作家達に近づいていたエドモンド・ウイルソン Edmund Wilson や、マルカム・カウリー等の著名な批評家達が位置していたし、そのまた周辺には、ジョン・ドス・パソス John Dos Passos や、セオドア・ドライザー Theodore Dreiser や、ファレル等が位置していた。アーネスト・ヘミングウェイ Ernest Hemingway のようにプロレタリヤ文学とはほとんど無縁に思える作家達までが、 1930 年代には、多少ともプロレタリヤ文学運動の影響を受けていたことが指摘され得るだろう。実際、ヘミングウェイは『持つことと持たざること』 *To Have and Have Not* (1937 年) のような社会参加的作品を書いているし、 1937 年の第二回全米作家会議では、人民戦線への参加を呼びかけたりもしたと言われている。[9] 知識階級を巻き込むこととによって、プロレタリヤ文学運動は皮肉にも衰退の一途を辿ることになるが、 1939 年頃までには、このプロレタリヤ文学運動もほとんど影をなくするまでになっていたことはすでに述べた通りである。

知識階級まで巻き込む趨勢にあった 1930 年代のプロレタリヤ文学運動の影響をスタインベックはどうしてあまり受けていないのだろうか、プロ

レタリヤ文学的題材を選びながらスタインベックはどうしてプロレタリヤ作家の道を進まなかったのだろうか、スタインベックの文学の基本的特質は奈辺にあるのだろうか。これらの疑問に答えることが、スタインベックの作品理解に役立つだろうし、1940年代以降に変節したかのように評価されるスタインベックの文学姿勢が、実は一貫して変わらないものであることが明瞭になってくるだろう。

III

たしかに、『疑わしい戦い』や『二十日鼠と人間』や『怒りのぶどう』にはプロレタリヤ文学的要素が散見される。特に、『怒りのぶどう』においては、小作農民達の苦境に同情し、抑圧されている側の視点に立っての社会抗議的要素が濃厚であるので、プロレタリヤ小説の特質を備えているように思える程だ。スタインベック文学の中に、プロレタリヤ文学的要素が幾分とも内包しているとすれば、まず第一に考えられるのは、出身地カリフォールニヤ州、サリーナス周辺における幼少の頃からの原体験がスタインベックをして小作農民や移住労動者達の生活に目を向けさせたことであり、第二には、親友の海洋生物学者エド・リケット Ed Rickett との出会いにより、潜在的に彼の文学的資質の中はあった非目的論的思考及び“breaking through”の概念が作品化されていく過程で、プロレタリヤ文学的題材であったストライキ問題とか、移住労働者達の「集団人間」としての生態が、スタインベックの非目的論的思考や“breaking through”の概念を表現するのに適していたことである。

スタインベックの場合、故郷サリーナスの自然環境の影響は大きく、『長い谷』*The Long Valley*（1938年）の中で一番よく知られている傑作「赤毛の小馬」と呼ばれている三部からなる短編（1945年にもう一編が追加され四部となる）には、主人公のジョディ Jody 少年の自然との交感が美しく描出されており、スタインベックの作家的資質の本領が充分に

発揮されている。牧童や、小作農民達に対する自然に培われた強い共感は、幼少の頃の原体験に根ざしたものであるだけに、抽象的なイデオロギーに左右されたりはしないのかもしれない。それに加えて、高校時代の休日とか、大学に進学してからも、農場や道路工事現場等で働いた体験があり、[10]それらの原体験が後の彼の作品の中で生命力の満ち溢れた現実感を産み出していると解することができるのだ。 1940 年代からスタインベックの創作家としての力量が急激に衰えだしたと指摘される理由の一つには、彼が 1943 年にニューヨークへ移り住んでいったことがあげられる。ニューヨークに移り住むことによって、サリーナスの土の香りから遠ざかったばかりでなく、それと同時に、彼の文学活動に生命力を与えつづけてきた親友のリケットとも疎遠になってしまうからだ。故郷サリーナスとスタインベックとの絆はウイリアム・フォークナー William Faulkner とヨクナパトーファとのそれにも似ていて、その作家にとってはその土壌からしか生命力の宿った文学作品は産みだされないのだということを如実に物語っている。

カリフォールニヤでは、労働者のストライキ行為が頻発していたと言われるが、スタインベックがその問題に関心を寄せ始めたのは 1934 年頃からであると言われている。[11]過去の原体験からスタインベックが労働者側の視点に立つのは当然の帰結であるのだが、そのストライキ行為に関心を寄せる彼の人間観・自然観・世界観が、いよいよ彼をその問題にコミットさせていくことになることにも目を向けるべきだろう。

スタインベックの人間観及び世界観の基盤には、相互に逆方向に力が働いているようにみえる二つの思考がある。一つは生物学的視点に基づく非目的論的思考と呼ばれているものであり、もう一つは独特の神秘主義的感覚から抽出されてくる" breaking through " の思考パターンである。

非目的論的思考は、リケットとの18年間の交友（ 1930 年から 1948 年まで）による影響が大きいと指摘されているが、[12]スタインベック自身もリケットに出会う以前から海洋生物学に興味を寄せていたと言われているよ

うに、彼の中に潜在的に芽生えていたものが、リケットとの触れ合いによって一層鮮明な形で浮び上ってきたと解釈した方が適切だと思われる。この非目的論的思考はスタインベック文学の技法を特色づけているばかりでなく、「スタインベック・ヒーローズ」と呼ばれる主要登場人物達の思考パターンであり、また、この非目的論的思考の延長線上に"breaking through"の概念も位置づけられるだけに、もう少し詳しく検討しておく必要があろう。

かって、エドモンド・ウィルソンは、

> Mr. Steinbeck almost always in his fiction is dealing either with the lower animals or with humans so rudimentary that they are almost on the animal level ... What is constant in Mr. Steinbeck is his preoccupation with biology.[13]

と指摘しました。たしかに、スタインベックには、非目的論的思考と呼ばれる「存在思考」"Is Thinking"によって、すべての既成概念を退け、事象をあるがままに観察し、その観察結果に基づいて、全体像に追ろうとする生物学的視点がある。人間を「動物のレベル」で捉えているように見えるのも、その「存在思考」に起因している。しかしながら、スタインベックは非目的論的思考を哲学的、形而上学的思考としてよりも、むしろ小説の技法として利用している場合が多い。スタインベックとリケットの共著、『コルテスの海』*Sea of Cortez*（1941年）の中で、スタインベックは非目的論的思考を、

> Strictly, the term non-teleological thinking ought not to be applied to what we have in mind. Because it involed more than thinking, that term is inadequate. Modus operandi might be better — a method of handling data of any sort.[14]

つまり、「資料を処理する一つの方法」として捉えた方がいいと考えているし、リチャード・アストロ Richard Astro も、

> Viewed in perspective, what Steinbeck seems to be doing in *Of Mice and Men* is using Ricketts' ideas about non-teleological thinking not a theme, but as fictional method.[15]

として、非目的論的思考を捉えている。

スタインベックの非目的論的思考に関する論議は、『コルテスの海』の第14章「復活祭の日曜日」"Easter Sunday"と題する個所で詳細になされているが、リスカも指摘しているように、ヘミングウェイの『午後の死』*Death in the Afternon*（1932年）や、『アフリカの緑の丘』*Green Hills of Africa*（1935年）がそうであるごとく、作家の人間間・世界観を知るのに役立つ資料的価値がある。[16]その点に関して、アストロは彼の研究書 *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist*（1973年）の中で、非目的論的思考の概念は本来共著者であるリケットの概念をスタインベックは小説の技法として利用しているにすぎないことを、かなりの資料を駆使して論証しているのだが、スタインベックの中にその概念を受け入れる基盤があったからこそ、『コルテスの海』の叙述部分においてだけでなく、スタインベックの他の作品の中でも、時には『二十日鼠と人間』におけるような形、つまり、小説の技法として、また時には、その概念を信条とする登場人物達の物の見方、考え方の特徴として作品化され得るのだと思われる。

事象をするがままに写しとっていこうとするこの非目的論的思考の小説技法は、スタインベックを現実感覚の鋭いリアリズム作家にする場合もあるが、社会問題の絡んだ作品、とくに、「社会抗議」的色彩の濃厚な作品においては、プロレタリヤ作家的プロパガンダ、いわゆる社会の根本的革命のために自からの芸術を主義主張のために捧げる精神、に落ち込んでしまうのを食い止めてくれる歯止め的役割を果たしてくれるのだ。つまり、この非目的論的思考はイデオロギーや宗教のような目的論的思考とは相容れない思考パターンであるのだ。

非目的論的思考と相俟って、スタインベックには一種独持の神秘主義的なものがあると指摘されている。大橋健三郎氏も、『総説アメリカ文学史』（1975年）の中で、「スタインベックの文学にはある独特な神秘主義の底流があって、それと彼のきわめて強い現実感覚とが、興味深い形で相関関係をなしているように思われる」[17]と指摘している。一方の極では、きびしいリアリズム精神が、もう一方の極では、普遍の層へ追ろうとする神秘主義的な模索が、スタインベック文学の基本的パターンを形成していると言えるが、この二つの要素の緊張関係の度合いによってスタインベックの多様とも思える作品群はきわめて整然と整理され得るのだ。非目的論的思考の度合いが強く働けば、『罐詰横町』*Cannery Row*（1945年）や、『気まぐれバス』*The Wayward Bus*（1947年）等の作品系列になるし、神秘主義的な模索の度合いが強く働けば、『知られざる神に』*To a God Unknown*（1933年）や、『エデンの東』*East of Eden*（1952年）等の作品系列になることがわかる。この二つの要素の緊張関係のバランスがうまく拮抗しているのが『怒りのぶどう』であるのだ。

非目的論的思考を標傍するリケットの神秘主義的性向に関して、アストロは、

> ... as Bertrand Russell has pointed out in *Mysticism and Religion*, mysticism may be a creed or simply an attitude toward life. And Ricketts' mysticism, firmly grounded on a naturalistic, scientific base, is of the latter type and suggests an approach toward a perception of reality which does not ignore but rather builds upon the analytic and discursive methods.[18]

と解説している。スタインベックの場合にも、まったく同じことが言えるのだ。ある時点まで、リアリズム精神で書いてきたものが、いつの間にか、"breaking through"を遂げ、神秘主義的なものが作品の中に入り込んでくるのだ。『怒りのぶどう』の最終部分が、まさしくその典型であると言える。スタインベック文学の特質を掌握していない読者にとっては、ス

トーリーの途中で放り投げを食ってしまったような感じを抱くのである。しかし、スタインベックの文学の特質に染んでいる読者にとっては、スタインベックの神秘主義的感覚から抽出されてくる " breaking through" の概念は全体像を認識するための一つの方策であり、作業仮説的役割を果していることがわかる。つまり、真相を認識するためにはリアリズム精神だけでは限界があるということなのだ。事象の全体像を的確に掌握するためには神秘主義的なものも併用しなくてはならない、とスタインベックは考えているのだ。スタインベック自身、次のように表明している。

> I don't think you will like my late It leaves realism farther and behind. I never had much ability for nor faith nor belief in realism. It is just a form of fantasy as nearly as I could figure. Boileau was a wiser man than Menchen. The festered characters of Faulkner are not very interesting to me unless their festers are heroic. This may be silly but it is what I am.[19]

つまり、スタインベックは「リアリズム精神に誠実でもないし、信頼もおいていない」のだ。その点に関して、ウッドバーン・ロス Woodburn Ross は、

> Steinbeck's writing is outside the strict scientific, naturalistic tradition, in that it is not objective.[20]

と指摘している。科学的唯物史観に立つマルキシズムを信奉する作家・批評家の側からのスタインベック批判は、まさしくその点にあったと言えよう。

一方の極では、リアリズム精神、そしてもう一方の極では、原始的とも言える神秘主義的感覚、その両極の拮抗するバランスの上に立って、スタインベックの文学空間は動いている。リケットといっしょにカリフォールニヤ湾に海洋生物の採集旅行に行った時、スタインベックは潮溜りtide－pool の海洋生物を詳細に観察することになるが、同時に、スタインベックの心は常に普編的なものへの思考へと移っていく。19世紀中葉の超絶主義者、ディビッド・ヘンリー・ソロー David Henry Thoreau の思

考パターンに似ていなくはない。否、まさしくソローが『ウオルデン』*Walden*（1952年）の中で行なっているのと同じ思考パターンで、スタインベックは潮溜りの中に宇宙を捉え、そこを万物の眼球に据えることによって普遍の層に迫ろうとしているかのように見える。ただし、スタインベックの場合には、最終的には現実的なものに、生きている人間に、眼が向けられていることは忘れてはならないだろう。その点に関して、スタインベックは『コルテスの海』の中で、

> It is advisable to look from the tide-pool to the stars and then to the tide-pool again.[21]

と表明している。その言辞の中に、スタインベックの人間観・世界観が適切に凝縮されていると言える。つまり、スタインベックが神秘主義的な、普遍的な層に迫ろうとするのは、あくまでも人間をマクロ的に掌握するための一つの方策にすぎなくて、けっして思想的な意味での神秘主義ではないことが理解されるのだ。

IV

さて、これまでスタインベックの作家的特質及び思考パターンについて論議し、彼の作品がプロレタリヤ文学的題材を扱いながらも、本質的にはプロレタリヤ文学とは異質な文学空間を創り出しているとの観点から、スタインベック文学の基本的な特質となっている非目的論的思考と神秘主義的なものとの不思議とも思える絡み合いについて考察してきた。抽象的なレベルでのスタインベック文学の特質論議のわく組みが個々の作品の中で、具体的にどのように機能しているかを検討していきたい。

『怒りのぶどう』について論じる前に、『怒りのぶどう』と同じく人間の集団を一つの「新しい」、「不思議な」生命体として、非目的論的思考でもって作品化している『疑わしい戦い』について、まず、論じていくことにしたい。二つの作品の類似点、及び相違点を検討していくことによ

って『怒りのぶどう』の特質が一層浮き彫りにされると思えるからである。

「集団人間」も他の生物の世界におけるのと同じように、一つの生命体として機能しているのだとするスタインベックの生物学的視点は、ストライキ参加者、つまり、「集団人間」を作品化しようとする時に、顕在化してくる。個人でありながら、なおかつ集団の中の細胞でもある人間が、他の生物と異なっているのは、人間が個人と集団の関係を認識できる点である。非目的論的思考の濃厚な作品の場合には、登場人物達は個人の内在性から捉えられるよりも、「集団人間」としての一つの生命体としての観点から捉えられるのである。フランスの批評家C．E．マニー Claude-Edmonde Magny は、スタインベックの小説にみられるこの特質を、アメリカの小説の特質として捉え、「非人称の小説」を創り出しているのだと指摘している。[22]

スタインベックの「集団人間」を題材にしている作品においては、「集団人間」の細胞としての生物学的実在に甘んじている大多数の人間集団と、その「集団人間」を非目的論的思考でもって外部から観察することになる人物と、最初は単なる観察者にすぎないが、自分自身その「集団人間」の細胞になることによって、"breaking through"を遂げ、集団の中にいる自分自身のアイデンティティを掌握し、その「集団人間」の中核細胞である眼球的役割をする細胞へと成長していく人物とがいる。「集団人間」を観察する役割を演じる人物、および自からの体験を通じて、集団の中にコミットしていく人物とが、いわゆる「スタインベック・ヒーローズ」と呼ばれる登場人物達であるのだ。『疑わしい戦い』のドック・バートン Doc Burton は前者に属し、『怒りのぶどう』のジム・ケイシー Jim Casy は後者に属するヒーローである。

『疑わしい戦い』のバートン医師は、果実採集労働者達の保健衛生管理をするのが職務なのだが、「集団人間」としてのストライキ参加者達の生態観察に関心を寄せている。スタインベックの親友リケットをモデルにしたような人物である。彼の徹底した非目的論的思考は、この作品の中で、

ややともすると共産党員のマック Mac およびやがてマックを乗り越えて「集団人間」の指導者的人物に成長していくことになるジム・ノーラン Jim Nolan 達の視点に限定されがちな傾向に歯止めをかける役割を果しており、劇的効果を創り出している要因になっている。バートン医師はストライキ参加者達を一つの「集団人間」として捉え、徹頭徹尾その観察者でありつづけるのである。共産党員マックの目的論的思考と対立させることによって、バートン医師の「集団人間」に対する立場は明瞭になっていく。彼はマックに、

> "Yes. Group-men are always getting some kind of infection. This seems to be a bad one. I want to see, Mac. I want to watch these group-men, for they seem to be a new individual, not at all like single men. A man in a group isn't himself at all, he's a cell in an organism that isn't like him any more than the cells in your body are like you." [23]

と言って、「集団人間」の観察に興味を寄せている自分の立場を明瞭に表現している。つまり、バートン医師がストライキに興味を寄せるのは、医師が人間の病気の原因を究明しようとしている時の科学的アプローチと似ていて、ストライキを社会の病として捉え、その傷口を冷徹な目で観察していこうとしてからである。

バートン医師が科学的客観性、つまり、非目的論的思考でストライキの実態を観察している人物であるとすれば、マックは硬直した党派的イデオロギーでもって、そのストライキを自分に有利になるように利用していこうとする人物である。「集団人間」としてのストライキ参加者達の集団を、マックはこれまでのオルグ経験を最大限に活用して、党の大義のために利用しているのである。バートン医師が非目的論的思考でもって「集団人間」を観察しているのとは対照的に、マックは党派的イデオロギーという目的論的思考でもって「集団人間」の集団心理を巧みに利用しながら、その「集団人間」の細胞組織の中に眼球的役割を果す中核細胞の形成を目論んでい

るのだ。つまり、マックは人間個々人の内在性には全く関心を寄せないし、また、この特殊なケースのストライキの勝利ということにもあまり関心を寄せていない。彼の関心は、むしろそのストライキの体験を通じての新入党員ジムの共産党員としての成長を遂げさせることにあり、そして、ストライキ参加者の中からも眼球的役割を果す中核細胞を養成していくことにあるのだ。個人の内在性を無視していること、および、ストライキ参加者達の集団を「集団人間」として外部から観ている点において、バートン医師とマックは共通するものがあると言える。一方は非目的論的思考で、他方は目的論的思考で、観ているという点が相違しているだけなのだ。

しかしながら、私達読者はこの両極をなすバートン医師とマックのどちら側からでもなく、マックに弟子入りして、このトーガス溪谷の果実採集人達のストライキをオルグするためやって来たジム・ノーランという若者の視点に立って、ストライキの成り行きを観ていくことになる。物語の冒頭のところで、読者はジムが生きたしかばね的状況から共産党に入党することによって、部分的に生に覚めだしてきたことに気づく。徹底した党派的思考をするマックと非目的論的思考でもって事象の全体像を掌握しようとするバートン医師との両極の物の見方に影響されながらも、個人の内在性にも目が届き、その内在性をも大切にしようとするジムは、ストライキをマックやバートン医師のように客観的に扱うことはできないのだ。やがて、彼は「集団人間」の中に、自からのアイデンティティを確認することによって、その「集団人間」の眼球的役割を果す中核細胞へと変貌していくのだ。つまり、共産党の細胞としてではなく、現実に起っているストライキに参加している「集団人間」の細胞へと変貌していくのである。扇動家のマックでさえもびっくりするほどの変貌であり、その変貌ぶりに対してマックは、

"You're getting beyond me, Jim. I'm getting scared of you. I've seen men like you before. I'm scared of 'em. Jesus, Jim, I can see you changing every day.... "[24]

と言って、ジムの成長を認めるのである。

「集団人間」の中に生きることによって、ジムは“breaking through”を遂げ、事象の全体像を掌握するとともに、自分自身のアイデンティティも確認するのであるが、ジムの「集団人間」の中核細胞への変貌により、ストライキ勝利への展望が開けようとしたまさしくその時点で、ジム自身がストライキの犠牲者になってしまうのだ。皮肉なことには、ジムの死体はマックの党派的イデオロギーを「集団人間」に伝達する機会を提供することになる。ジムの死体を取り巻いているストライキ参加者達に向かって、マックは、

"Comrades! He didn't want nothing for himself—"[25]

とジムが「集団人間」の存続のため以外には何も望んでいなかったと強調するのだが、何かしら空しい感じが残るだけだ。

スタインベックのこの小説における視点の曖昧さが、一方では、非目的論的思考でもってストライキの成り行きを外面から写実的に描き出すことになり、もう一方では、ストライキを通じてのジムの人間的成長の物語の骨子を提示することになるが、ジムの人間的成長の物語が充分に作品化されているとは言えないし、また、非目的論的思考と神秘主義的なものがうまく融合しているとも言えないだろう。しかしながら、この作品の中にスタインベック文学の基本的パターンの芽は充分に見うけられるのである。つまり、マックの指導下で共産党員へと成長していく過程と、バートン医師の影響で非目的論的思考の洗礼を受けていく過程とで、ストライキ参加者達の「集団人間」を外部から観ていたジムは、党派的イデオロギーでもって「集団人間」を外部から扇動しようとするマックの目的論的思考に限界を感じるとともに、科学的客観性でもって事象を観察するだけのバートン医師の非目的論的思考にも限界を感じて、彼等を乗り越え、「集団人間」の内部に自から入って生きることによって“breaking through”を遂げ、事象の全体像を掌握するとともに、自からのアイデンティティを確認するのである。このジムを通じて、私達読者は『疑わしい戦い』において、スタ

インベックが提示しようとしている「スタインベック・ヒーローズ」の原型を垣間見るのである。

『怒りのぶどう』において、このパターンは一層明瞭な型で現われてくるのだ。バートン医師とマックの両面、および変貌を遂げたジムを内包しているのがジム・ケイシーである。物語が始動する時点では、ケイシーはすでに説教師の職を投げ捨てて、エマーソンの如く、キリストの如く、釈迦の如く、リアリティを求めて荒野を彷徨い、神秘的な開眼を遂げているのである。現実の諸問題を解決するにあたっては伝統的な宗教は無力であり、"social mind"の中に入って、自からその中に生きることによって、その「集団人間」を蘇生させねばならぬとするケイシーの思想に関しては、アメリカの伝統的な思想の潮流であると指摘されるところだが、[26]『怒りのぶどう』においては、それがケイシーからトム・ジョード Tom Joad へと受け継がれていく主題なのである。ケイシーは非目的論的思考でもって事実認識をしていくとともに、その状況を解決すべく行為者としての役割りも担っていくことになる。ケイシーを通じてのトムの意識の変革、および「集団人間」の中に自から生きることによっての"breaking through"の達成、およびその"breaking through"することによっての事象の全体像の掌握、そして「集団人間」の中に自からのアイデンティティの確認をし、「集団人間」の蘇生のためにその中核細胞へと変貌していくことが、『怒りのぶどう』の主要なモチーフであることがわかる。

『怒りのぶどう』は黒い猛吹雪 black blizzard と呼ばれる砂嵐の吹きまくったオクラホマ州を中心としたアメリカ中南部の乾燥平源地帯（Dust Bowl)において、"dusted out"され、それに追撃ちをかけるかの如く襲ってきた農業資本の合理化のため、"tractored out"された小作農民達が、新しい生活の場を求めて「約束の地」カリフォールニヤへと集団移動していく姿を作品化したものであることは今更言及するまでもないだろう。『怒りのぶどう』の登場人物達は、かくして危機そのものの中に放り込まれることになる。その移動の生態を、カメラの眼で捉えるが如く、

非目的論的思考でもって描写していくことになるのだが、「集団人間」としての移住労働者達の動きを、その「集団人間」の細胞分子的構成要素であるジョード家の物語を横糸とし、中間章での広い視野からの状況描写を縦糸とすることによって、内部と外部から移住労働者達の生態を追跡することになる。

生存の極限状態において、一方では、家族がつぎつぎと離散していき、Ma ジョードの必死の努力にもかかわらず、カリフォールニヤにおける「アメリカの夢」の実現は潰え去っていくのである。このマイナス方向に動くジョード家の運命の描写と平行して、もう一方では、「適者生存」の原理に基づく生存へのあくなき運動、つまり、移住労働者達の「集団人間」がその中核細胞とも言える眼球をしだいに形成し、新らしい生命体としての形態を帯びはじめてくるのだ。「集団人間」の眼球的役割をしているのがジム・ケイシーであり、やがてはトム・ジョードへと受け継がれていくのである。ウォーレン・フレンチ Warren French はそれを "the education of the heart" と呼び、トムばかりでなく、Ma ジョードやロザシャーンも同様に人間的成長を遂げていくのだと解説している。[27]

生存の極限状態の中での家族の崩壊というネガティブなモチーフとその危機的状況の中からの「集団人間」の蘇生のための中核細胞の形成というポジティブなモチーフとが互いに絡み合って作品の主題を鮮明に提示していくのである。"dusted out" され "tractored out" された小作農民達の典型としてジョード家が摘出され、彼等のカリフォールニヤへと移住していく生態を、時には、ジョード家の物語部分におけるようなミクロ的手法でもってクローズアップしてみせ、時には、中間章部分にみられるようなマクロ的手法で事象の全体像を捉えていくのだ。危機的状況の中で崩壊寸前にあるジョード家の生活にスポット・ライトをあてていくモチーフは、はっきりした線で描き出されていると言える。中間章の巧みなスタイルの駆使によって、その危機感は一層倍加されるのである。

この明瞭な太い線によるジョード家の危機的状況下での崩壊作用という

モチーフとは対照的に、ケイシーを通じての“the education of the heart”という人間的成長を扱うモチーフは、点線で、あるいは象徴的に展開されていく。「集団人間」としての移住労働者達の間に芽生えだしてくる“I”から“we”への意識の変化を、作者は非目的論的思考で捉え、主要登場人物には事象の全体像を掌握させるべく“breaking through”を遂げさせるのである。

ケイシーは、バートン医師が社会の病としての傷口的意味を持つストライキの実態を観察するのが目的で果実労働者達の中に入り込んでいるように、移住労働者達に何が起っているのか、何が起ろうとしているのかを確かめる目的でジョード家に加わり、カリフォールニヤまでやって来るのであるが、バートン医師とは異なり、やがては自からその「集団人間」の中核細胞になって、その「集団人間」の蘇生のために自からの命まで捧げるのである。つまり、彼は「集団人間」の眼球的存在になるのだ。そして、その眼球の形成を恐れる自警団員の手によって暴殺されるのである。しかしながら、生命体の中に芽生えてきた眼球を完全に取り除くことはできない、と作者は暗示しているようだ。ケイシーの影響を受けたトム・ジョードがやがては「集団人間」の眼球細胞へと成長していくことが暗示されているからである。

非目的論的思考で事象を視ていたケイシーが、「集団人間」の中に自から入り込むことによって、自からのアイデンティティを確認し、事象の全体像を掌握できたように、トム・ジョードも非目的論的思考の持ち主であったが、ケイシーが自警団員に暴殺されるのを目撃するにおよんで、自からも“breaking through”を遂げ、「集団人間」の眼球的役割を果たすべく変貌していくのである。

『怒りのぶどう』の最終章の場面でのロザシャーンの飢え死にしかけている男に乳房をあてがう象徴的なしぐさや、[28]大洪水の去った後で新芽が萌えでてくる場面[29]等は、トム・ジョードの人間的成長への変貌と相俟って、『怒りのぶどう』の二つのモチーフの中の一つである“the education

of the heart," あるいはまた、生命の神秘性についてのスタインベックの生物学的視点を浮き彫りにしていると言える。サイクルをなす自然の営みには初めもなく終りもなく、ただそれが生命のくり返しにすぎないとの暗示を含めた最終部分は、スタインベックの人間観・自然観の結晶であると言えよう。

『怒りのぶどう』は、一方では「集団人間」としての移住労働者達の危機的状況下での生態を、あるいはマクロ的手法であるいはミクロ的手法で追い、もう一方では、その危機的状況下での生存の中で芽生えだしてきた「集団人間」の中核細胞の形成の過程をミクロ的手法で捉え、最終部分で、この二つのモチーフをうまく融合させていると言える。つまり、トムとMaジョードとの最後の別れの場面は、ジョード家の家族構成員がつぎからつぎへと死別し離散していくモチーフと、ケイシーによって育まれてきた新しい「集団人間」の眼球へと成長を遂げていくトムの"breaking through"のモチーフとが一点で交わり融合したことを暗示しているのだ。大洪水の後で萌え出てきた草の新芽は、踏みつけられても、否、踏みつけられればなおさらに、たくましく萌えでてくる生命の不思議な秘密を象徴的に描写していると言える。つまり、「集団人間」としての移住労働者達の苦難のあがきの中から、新しい、不思議な生命体が誕生しつつあることを暗示しているのである。ロザシャーンの乳房をあてがうしぐさは、死産させた赤子（潰え去ったアメリカの夢）に代わって、「集団人間」の細胞の間に連帯意識が萌えでてきたことの象徴的描写であると言えよう。つまり、ジョード家の誇り高い家族意識が崩壊していく中で、他者も同じ輪の中に繰り込んでいく意識の変革が見えだしてきたことを示唆するための象徴的描写なのだ。

V

非目的論的思考でもって、ジョード家を核とする「集団人間」としての移住労働者の生態を、潮溜りの海洋生物を観察するのと同じように、客観的に描写していくが、潮溜りにおける場合と異なる点は、外面からの観察だけではなく、事象の全体像を掌握するために、自からも対象物の中に入り込み、その内部に自からも生きていくことになる「スタインベック・ヒーローズ」を創り出していることだ。非目的論的思考に基づいての"breaking through"していく人物の創造こそ、まさしくスタインベック文学、とくに、『怒りのぶどう』の特質であるのだ。題材が労働者のストライキという社会問題を含んでいるだけに、「集団人間」としての移住労働者達の労働争議にコミットしていくということが、社会抗議の色を帯びた小説として捉えられ、1930年代のプロレタリヤ文学の系譜として、おもに社会学的見地から実証的論議が展開されたという事実は、『怒りのぶどう』の重要な一側面が、そのリアリズム精神にあることを印象づけるものだ。しかしながら、スタインベックの「集団人間」への関心が、左翼イデオロギー的なものではなく、集団を一つの生命体として捉え、その生命体の生態を観察していく中で、その生命体の中核細胞とも言える眼球細胞の不思議な、神秘的な誕生を生物学的視点で追跡していくことにあることは、これまでの論議で論証してきたところである。とくに、眼球的役割を果たす中核細胞としての個が、集団の中で自からのアイデンティティを確認し、"breaking through"していく過程にスタインベックは興味を寄せていると言えよう。しかしながら、スタインベックの最終的な関心は人間に向けられており、"breaking through"することも結局のところ全体像を掌握するための一つの方策であり、集団の中の個人の内在性に目が向けられるのは当然であろう。"It is advisable to look from the tide-pool to the stars and then back to the tide-pool again."と表明するスタインベックの基本的姿勢は変わらないのである。

スタインベックが『怒りのぶどう』を書く際に、移住労働者達と生活をともにしたことがあると指摘されているし、[30]その実地調査が、単に小説の題材探しの域を越えて、スタインベック自身が、ケイシーやトムと同じように、観察の対象の中に入り込み自からその内部に生きて、"breaking through"を遂げるべく努力をしたであろうが、事象の全体像の掌握は、外部からの単なる観察だけでは不充分であり、自からもその中に生きることによってしか達成され得ないとするスタインベックの立場は、プロレタリヤ文学の一面をあるいは含んでいるのかもしれない。しかしながら、プロレタリヤ文学と類似しているようで相違する基本的なスタインベック文学の特質を掌握しておくことは大切なことである。

スタインベックの現実感覚と非目的論的思考に基づく神秘主義的感覚との融合が、1930年代という特殊な状況下での移住労働者達の苦難の実態を外面から描写していくだけにとどまらず、「集団人間」としての移住労働者達の中に新らしい生命体の芽が萌えだしつゝあるとするオプティミステックな概念を吹き込むことによって、悲劇的状況を逆手に取った新らしい価値観の創造へと読者を誘うのである。「適者生存」の原理に従って、「集団人間」としての移住労働者達は踏みにじられることによって一層自からのアイデンティティを自覚し、「集団人間」の眼球が形成されていくのである。

従って、『怒りのぶどう』は外面的には移住労働者達の苦難の実態という社会抗議的問題を扱っていながら、本質的には、作者の非目的論的思考と神秘主義的概念の融合という深層的創作パターンを巧みに虚構化したものであると結論づけることができる。

Notes

[1] Arthur Mizener, "Does a Moral Vision of the Thirties Deserve a Nobel Prize?" *The New York Times Book Review* (Dec. 9, 1962), p. 4.

[2] See Warren French, "Introduction" to *The Novels of John Steinbeck: A Critical Study* by Howard Levant (University of Missouri Press, 1947), pp. x–xi. And also see John Ditsky, *Essays on East of Eden* (Steinbeck Monograph Series, No. 7, 1977), p. 2.

[3] Joseph Warren Beach, *American Fiction* 1920–1940 (Russell & Russell, 1941), p. 327.

[4] Malcolm Cowley, "A Farewell to the 1930'S" *A Casebook on The Grapes of Wrath*, ed. by Agnes McNeill Donohue (Crowell, 1968), p. 22.

[5] James Burkhart Gilbert, *A History of Literary Radicalism in America*, translated by Eichiro Ohtsu (Kenkyusha, 1974) p. 136.

[6] Cowley, op. cit., p. 22.

[7] Gilbert, op. cit., p. 174.

[8] Peter Lisca, *John Steinbeck: Myth and Nature* (Crowell, 1978), p. 88.

[9] Gilbert, op. cit., p. 176.

[10] See Peter Lisca, "John Steinbeck: A Literary Biogrphy," *Steinbeck and His Critics*, ed. by E. W. Tedlock, Jr. and C. V. Wicker (University of New Mexico Press, 1957), p. 6. and also see Lisca, op. cit., p. 64.

[11] Warren French, ed., *A Companion to the Grapes of Wrath* (The Viking Press, 1963), pp. 37–38.

[12] Richard Astro, *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: the Shaping of a Novelist* (The University of Minnesota Press, 1973), p. 4.

[13] Edmund Wilson, "The Californians: Storm and Steinbeck" *A Casebook on The Grapes of Wrath*, reprinted from *Classics and Commercials* (Farrar, Straus & Co., 1950), p. 152.

[14] *The Log from the Sea of Cortez* (Pan Books Ltd., 1960), p. 205.

[15] Astro, op. cit., p. 106.

[16] Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (Rutgers Univ. press, 1958), p. 183.

[17] 大橋健三郎・斉藤光・大橋吉之輔編『総説アメリカ文学史』（研究社、1975）、P. 362

[18] Astro, op. cit., p. 29.

[19] Elaine Steinbeck and Robert Wallsten, eds., *Steinbeck: a Life in Letters* (The Viking Press, 1975), p. 87. This remark is found in a letter to his friend, Carl Wilhemson, on August 9, 1933.

[20] Woodburn o. Ross, "John Steinbeck: Naturalism's Priest," *College English*, X (May 1949), p. 434.

[21] *The Log from the Sea of Cortez*, p. 267.

[22] Claude-Edmonde Magny, *The Age of the American Novel*, translated by Eleanor Hochman (Unger, 1972), p. 164.

[23] *In Dubious Battle* (The Modern Library, 1936), pp. 144-5.

[24] Ibid., p. 274.

[25] Ibid., 343.

[26] See Frederick I: Carpenter, "John Steinbeck: American Dreamer" and "The Philosophical Joads," *Steinbeck and His Critics*, p. 78., p. 248.

[27] Warren French, *John Steinbeck* (Twayne, 1961), p. 101.

[28] *The Grapes of Wrath* (The Viking Press, 1939), pp. 618-619.

Bibliography

Astro, Richard. *John Steinbeck and Edward F. Richetts: The Shanping of a Novelist*. Minneapolis: The University of Minnesota Press, 1973.

Beach, Joseph Warren. *American Fiction*: 1920-1940. New York: Russell & Russell, 1941.

Donohue, Agnes McNeill, ed. A *Casebook on The Grapes of Wrath*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968.

French, Warren. *John Steinbeck*. New York: Twayne Publishers, Inc., 1961.

_____. *A Companion to The Grapes of Wrath*. New York: The Viking Press, Inc., 1963.

Gilbert, James Burkhart. *A History of literary Radicalism in America*, translated by Eiichiro Ohtsu. Tokyo: Kenkyusha, 1974.

Levant, Howard. *The Novels of John Steinbeck: A Critical Study*. Columbia, Missouri: University of Missouri Press, 1974.

Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck*. New Jersey: Rutgers University Press, 1958.

———. *John Steinbeck: Nature and Myth*. New York: Thomas Crowell Company, 1978.

Mizener, Arthur. "Does a Moral Vision of the Thirties Veserve a Nobel Prize?" *The New York Times Book Review*, December 9, 1962.

Magny, Claude-Edmonde. *The Age of the American Novel*, translated by Eleanor Hochman. New York: Frederick Unger Publishing Co., 1972.

Steinbeck, Elaine and Robert Wallsten, eds. *Steinbeck: A Life in Letters*. New York: The Viking Press, 1975.

Steinbeck, John. *In Dubious Battle*. New York: The Modern Library, 1936.

———. *The Grapes of Wrath*. New York: The Viking Press, 1939.

———. *The Log from the Sea of Cortez*. London: Pan Books Ltd., 1960. (New York: The Viking Press, 1951), and the text *Sea of Cortez* is originally published in 1941.

Tedlock, E. W., Jr. and C. V. Wicker, eds. *Steinbeck and His Critics*. Albuqueque: University of New Mexico Press, 1957.

大橋健三郎・斉藤光・大橋吉之輔編『総説アメリカ文学史』東京:研究社,1975.

附記:

この研究論文は、1980年11月29日、第二回琉球大学アメリカ研究大会において口頭発表したものに加筆したものである。